韓国　大邱大学校コース

【実施期間】：2023 年 2 月 5 日～2023 年 2 月 26 日（22 日間）
【参加学生】：20 名

【教育研究活動の内容】：

学生は 16.5 時間の事前研修を受けた後に現地のコースに参加した。現地では、60 時間の教室内授業及び 15 時間の課外活動に参加し、毎日実習日誌を作成した。

事前研修では、韓国文化に憧れて研修参加を決めたものの、韓国語の学習経験が乏しい学生が多数いたため、集中講座で韓国語に関する基本的な知識をしっかり学んだ。また、全体的な説明や研修先大学の紹介をはじめ、海外留学における危機管理及び海外での健康管理などについて詳細に説明を行った。さらに、過去に本コースに参加した先輩学生が現地での生活、勉学についての経験談を紹介し、研修生活を充実させるためのアドバイスをしてくれた。

現地での研修は、教室内授業と、文化体験、現場学習といった課外活動で構成されていた。授業初日にプレスメントテストが行われ、同じ語学レベルの学生が同じクラスで座学を受けることになった。教室内授業は、十数人の小クラスで行われ、効率のよい、学習しやすい環境であった。文化体験では、韓国文化の体験活動（手鏡作り・凧揚げ）や、現地の大学生と親睦を深める交流会が実施された。現場学習では、陜川映像テーマパークに行き、韓国の伝統的な建物や町並みを見学した。

さらに、研修中は毎日実習日誌を作成することを義務としていた。実習日誌の作成を通して、参加者が 1 日の授業内容やプログラム内で感じたことを振り返ることができ、次の日の授業に効果的に臨むことができた。

【教育研究活動の成果】：――参加学生が提出した「海外研修報告書」より抜粋、整理

<u>１．学生は教育面、生活面等において日本と現地の違いを認識し、異文化の比較をすることができた：</u>

① テストの時に携帯を先生に集められ携帯を預けてテストを受けた。また、授業中の携帯操作や居眠りなどで叱られる生徒が多数見受けられ、日本よりも授業態度などに関する規制が厳しいことを感じた。

② 韓国人の急ぐ文化が関係しているのではないかと思うが、タクシーやバスなどは、日本人からすると安全運転の概念が無いかのような荒さを感じる。バスは基本的に急発進、急ブレーキであり、まるでジェットコースターに乗っている気分だった。また、バスは乗り降りの際の扉の開閉が早く、就く前には立って降りる準備をしておく必要があった。人を待たせることには凄く厳しいのだと感じた。韓国人の行動速度に合わせることが大変だった。

③ 交通面では、日本よりも歩行者優先の意識が低く、信号を無視して突進してくる車やバイクが多かったし、横断歩道も歩行者がずっと待っていることが多か

った。また、車のスピードも速いから、すぐに横断歩道に飛び出す留学生達に危なさを感じた。

④ 店の店員は、座ってスマホを片手に接客している人が多くみられた。電話しながらレジをしている人などもいた。日本とは違い、サービス業の緩さを感じた。

⑤ 町では、トイレがホテルやデパートなど大きな建物内にしかないうえ、日本ほど綺麗ではないので少し抵抗があった。

⑥ 現金で支払いをする現地の人はあまり見ないくらいにキャッシュレス化が進んでいる。バスや電車は専用の交通カードでしか支払えなかったのでかえって不便だった。

⑦ 韓国のタバコには、パッケージにタバコを吸っている男の人の遺影の写真などがプリントされていた。コンプライアンス的な部分は日本とは異なっている。

⑧ 食事の時は、日本ではお椀を手に持って食べるのがマナーだが、韓国ではこれはマナー違反になる。日本ではもったいないことだが、韓国では、作ってくれている人へ「もうお腹いっぱいだ」という合図として少し食事を残すことがある。常識が反対な感じがして不思議だった。

⑨ 食べ物屋では前菜など注文していない食べ物が沢山出てくるし、コンビニはおまけがついてくる商品が多いから、飲食系に関しては日本よりもお得感がすごくあった。

⑩ 韓国では日本よりも年功序列･上下関係がはっきりしており、目上の人を敬い、礼儀を重んじている。家族の中でも敬語を使っていたのが特に印象的だった。

⑪ 街中に芸術品やモニュメントが多い。至る所にモニュメントやアート作品があり、街の公衆トイレには絵画があった。芸術品は贅沢の中でも最高峰であり、芸術品にお金がかけられることに、韓国の近年の発展状況が垣間見られる。

２．学生が外国語学習や、異文化と触れあうことの楽しさを覚えたり、勉強意欲やモチベーションを高めることができた：

① 大邱市は､歴史ある韓国でも有数の薬令の街である｡薬膳料理のお店も豊富で、食べ歩きをしたうちに、からだに優しく、からだに良い美味しい食べ物についての興味を沸く、もっと勉強してみたくなった。

② 韓国ドラマや韓国アイドルから韓国の文化などに興味を持ち始めたが､研修に参加して、他のこともしっかり学んで、韓国という国がどういう国なのかということを最初から知りたいという気持ちになった。

③ 韓国だけでなく､他の国は日本とどこがどう違うかについて興味を持つようになり、他の国にも行きたいという意欲が出た。

④ 韓国語を学び、話せたという事は、日本に来ている韓国人の人を助けることができると考える。学んだことを日本にいても発揮できるように、自信を持って韓国語を話して行きたい。

３．学生が新しい目線で物事を考えたり、語学力を高めたり、自分の不足を認

識したり、将来について新しい可能性を見つけることができた：

① 研修を通じて、韓国の文化を身近に体感し、韓国への関心が高まるとともに、日本の文化の良さにも気づくことができ、日本のことがもっと好きになった。

② 文化・民族の歴史や慣習が違っても、人間としての喜怒哀楽を感じるところは、みんな同じであるということを再認識した。

③ 現地の人と話す機会があっても聞き取れないことが多々あったのでリスニングをもっと強化する必要があることが分かった。

④ 授業以外はすべて自由行動なので、自分がしたいことはすべて出来る。しかし、逆に何もないままで一日を終わらせることにもなる。何事にも積極的に参加し、自ら行動する行動力が本当に大事だと思えた留学であった。

⑤ 充実した研修にするためには、語学力を少しでも多く身につけておくが大切だと感じた。さらに、言葉が通じなかった際は英語で聞かれることが多かったので、世界共通語の英語ができると良いと感じた。

⑥ 現地の人々に日本を紹介できるよう、日本のことについてもっと学んでおくべきだと気づいた。

オーストラリア　ビクトリア大学コース

【実施期間】：2023 年 2 月 7 日～3 月 20 日（42 日間）
【参加学生】：4 名

【教育研究活動の内容】：

学生は 12.5 時間の事前研修を受けた後に現地のコースに参加した。現地では、100 時間の教室内授業に参加した。

事前研修では、全体的な説明や研修先大学の紹介をはじめ、海外留学における危機管理及び海外での健康管理などについて詳細に説明を行った。また、オーストラリアでの留学経験がある先輩学生が、オーストラリアでの生活、勉学についての経験談を紹介し、研修生活を充実させるためのアドバイスをしてくれた。

研修参加者の英語力を測るプレスメントテストが授業前に実施され、参加学生は授業の初日から自分の語学レベルに合わせたクラスで授業を受けることができた。教室内授業は、午前は 9 時から 2 時間、午後は 13 時から 2 時間の一日 4 時間であった。十数人の小クラスで行われたうえ、短期集中型で集中力も継続できるため、とても勉強しやすいシステムであると参加者から評価を受けた。 なお、大学が課外活動を企画していなかったため、参加者が授業外の時間をどう計画するかによって、個々の研修の充実度が大きく変わる傾向にあった。

【教育研究活動の成果】：**――参加学生が提出した「海外研修報告書」より抜粋、整理**

１．学生が教育面、生活面等において日本と現地の違いを認識し、異文化の比較をすることができた：

① ともかく時間にルーズであった。公共交通機関は時間通りに来ることがほぼないため、遅れることを頭の中に入れた上で行動しないといけなかった。
② 上述のためか、学校では遅刻などに寛容であった。遅刻したとしても大丈夫だよというような感じで、日本みたいにチェックされたりしなかった。また、飲食しながら授業を受けてもよいことになっていた。いい意味できっちりせず、型にハマってないのがよかった。
③ 歩行者の信号無視が普通だった。信号が赤でも車が来ていなければ渡る人が多かった。
④ 洗濯は毎日するものではなかった。バスタオルも一週間くらいは同じものを使っていた。お風呂上がりの綺麗な身体を拭いているから汚れていないという考え方のようだ。
⑤ 日本と違って現金ではなく、クレジットカードでの支払いが多い。現金が使えないお店もあった。
⑥ お店では、店員が必ず話しかけてくれ、「あなたにはこっちが似合うよ」のような、日本ではあまり言われないような事まで話したりした。

⑦ 食べ物を持って歩いていると、「それどこで買ったの？」や「美味しそう」と言われたり、まじまじ見られることがあったので食への興味はとてもあるように感じた。
⑧ 日本だと年上の方には敬語を使ったり、目上の人を敬う文化が根強いが、オーストラリアでは年齢に関係なく気軽に話したり、一緒に遊んだりすることができた。
⑨ 日本では多く偏見がもたれるタトゥーもオーストラリアではオシャレの一つとして認識され、男女問わず多くの人が入れていた。
⑩ みんなそれぞれ自分・個性を持っていてまわりを気にしなくてもいいのがとても良かった。
⑪ 土日祝などは店が閉まり、バスなども極端に便数が少なかった。日本みたいに働いてばかりでなく、休むときは休むことでオンとオフがとてもはっきりしているように感じた。

２．学生が外国語学習や、異文化と触れあうことの楽しさを覚えたり、人間関係の輪を広げたり、勉強意欲やモチベーションを高めることができた：

① オーストラリアは多文化・多民族なので都市部ではさまざまな文化に触れることができ、1 つの国にいながらにして他の国のことも深く知ることができた。本当に楽しい日々だった。
② 英語があまり得意ではなかったので、最初の頃は話すことがとても怖かったが、出会った人達は優しくてカタコトな英語でも真剣に聞いてくれてコミュニケーションをとることが楽しくなった。
③ 街で出会った人 100 人に話しかけて英語で会話する練習に付き合ってもらうというミッションを自分の中で課していた。最初は断られたり、言葉が出て来なくて会話が続かないなど大変な思いをしたが、結果的に 121 人の人と話すことができ、中には帰国後でも連絡を取り合っている人とも出会えた。
④ 研修先で同じ志を持った日本人の友達や外国の友達など、これからも一生付き合っていきたい人に出会えて幸せであった。

３．学生が新しい目線で物事を考えたり、語学力を高めたり、自分の不足を認識したり、将来について新しい可能性を見つけることができた：

① 帰国後、研修前よりも英文がクリアにみえ、読んだり、解いたりするスピードが格段に速くなったことが分かった。
② 私のクラスはクラスメイトの年齢や国籍などがバラバラだった。なにかを学ぶことに年齢など関係ないことを改めて実感した。
③ ホームステイでの共同生活を通じて、自分の許容範囲は人によってちがう、つまり価値観の違いは誰しもあるため、対人関係において自分の気持ちを素直に伝えることの大切さが改めてわかった。

④　研修参加は言葉では表せないほど貴重な時間だった。毎日新しいもの、新しい人、新しい考え方と様々な価値観に出会った。自分にとってプラスになるものもあったが、それはありえないと感じたものもあった。良くも悪くも私を成長させてくれる日々であった。

⑤　大変なことも多かったり、悩んだり様々な事があったが、研修に参加してこそ味わえた感情であった。研修で自分の悪かったところ、考え方を変えることができた。

⑥　学校の先生も友達も私のパーソナリティーを褒めてくれて、ありのままの自分を好きでいてくれる人がいて本当に生きやすかった。私も研修生活を通じて自分の視野や価値観が明らかに変化したのがわかった。そして自分のことがより一層好きになれた。

⑦　「わからないことがあったら、その場ですぐに質問すること。わからないことは恥ずかしいことではないし、あなたたちはこれからもっと英語が伸びる。焦らなくていいよ。」と先生が授業の中で言っていたのを今でも覚えている。この言葉が私の背中を押してくれたし、この言葉を聞き取れたことで自信がついた。

カナダ　リジャイナ大学コース

【実施期間】：2023 年 3 月 4 日～2023 年 3 月 28 日（24 日間）
【参加学生】：1 名

【教育研究活動の内容】：

学生は、12 時間の事前研修を受けた後に現地コースに参加した。現地では、68 時間の教室内授業及び 44 時間の課外活動に参加した。

事前研修では、全体的な説明や研修先大学の紹介をはじめ、海外留学における危機管理及び海外での健康管理などについて詳細を行った。また、過去に本コースに参加した先輩が、現地での生活、勉学についての経験談を紹介し、研修生活を充実させるためのアドバイスをしてくれた。

研修参加者の英語力を測るプレスメントテストが渡航前にオンラインで行われたため、参加学生が授業の初日から自分の語学レベルに合わせたクラスで授業を受けることができた。

教室内授業は、午前は座学中心であった。座学といっても先生の授業を聞いたりするだけでなく、学生同士でグループを作り対話を行いながら授業を行うアクティラーニング形式であった。午後は、午前中の授業内容でゲームをしたり、先生が用意してくれたカナダならではのお菓子などを食べそれについて学んだりするなど、遊んで学ぶ形で勉強を進めた。

課外活動は、学内で場所探しゲームをしたり、カナダやサスカチュワン州の有名なスポーツ、動物についてのビデオを鑑賞したりした。また、現地の学生と一緒にスポーツやゲームをしたり、ディスカッションをするなどして現地の学生と関わる時間も週 3~4 回あった。さらに、休日には博物館や美術館の見学などを行った。

【教育研究活動の成果】：――参加学生が提出した「海外研修報告書」より抜粋、整理

<u>１．学生が教育面、生活面等において日本と現地の違いを認識し、異文化の比較をすることができた：</u>

① カナダと日本の文化・教育の違いで最も強く感じたのは、カナダに住んでいる人たちはいい意味で自由で時間にルーズであることや、メリハリがしっかりしているところである。バスに乗っているときに運転手がいきなり、バスを降りて買い物に行ったりタバコを吸ったりなどの出来事に遭遇した。周りの一緒に乗っていた人たちは気に留めていなかったので日常茶飯事であるということが分かりとても驚いた。メリハリについて感じたのは、授業での出来事である。先生は、休む時は休む事を大切にし、休んでいない生徒には休むように促していたりしていた。また、授業に遅れてきた生徒に対し、嫌な顔をすることなく「気にしないで」と言っているところに日本との違いを感じた。

② レストランなどでの食べ残しを持ち帰りができるところに日本との違いを感

じた。日本では、食中毒などが危惧され食べ残しを持ちかえることが出来るお店はあまりないが、カナダでは、殆どのお店は持ち帰りができる。店の食卓に持ち帰りの箱が置かれたり、お店の人が「持って帰ってくれてありがとう」と言ったりした。むしろ食べ残しを持ち帰ることが主流であった。

２．学生が外国語学習や、異文化と触れあうことの楽しさを覚えたり、人間関係の輪を広げたり、勉強意欲やモチベーションを高めることができた：

① 留学を通じて、英語だけでなくたくさんの文化や他国の人たちと関わることにより英語を使う楽しさや文化の違いについての面白さを学ぶことができた。

② 現地の人との交流により、新しいことを知ることができるし、日本では気づかなかったが他国から見た日本の良いところを知ることができた。コミュニケーションをとることの楽しさを実感した。

③ 英語には苦手意識を持っていたが、研修に参加して「もっと話せるようになってもっとスムーズに会話ができるようになりたい」など、英語の勉強をすることへのモチベーションを高めることが出来た。また、留学を終えてからも、洋画などで英語に触れて英語を学ぶことを続けていこうと考えている。

３．学生が新しい目線で物事を考えたり、語学力を高めたり、自分の不足を認識したり、将来について新しい可能性を見つけることができた：

① 上手く英語を話せなくても、頑張って話すことで話が広がり相手と打ち解けるのが早いことが分かった。

② 伝えることの大切さや難しさを実感できた。